

可能性を表す中国語の認識的モダリティの“要”に関する日中対照研究

張 婷

关于表示可能性的汉语认识情态“要”的汉日对比研究

张 婷

摘 要

表示可能性的汉语认识情态“要”拥有多种日语对应形式。“要”之所以能与各种日语形式相对应,是因为“要”与“言及对事态发生的确信程度”无关。相反,与表示可能性的汉语认识情态“要”相对应的“ダロウ”“カモシレナイ”“ニチガイナイ”等日语情态虽然所表达的“对事态发生的确信程度”不同,但它们都有“言及对事态发生的确信程度”的共通机能。正因如此,“ダロウ”“カモシレナイ”“ニチガイナイ”等日语情态才能把自身含有的“对事态发生的确信程度”附加于“要”,且与之相对应。



目次

1. はじめに
 - 1.1. 可能性を表す認識的モダリティの“要”について
 - 1.2. 可能性を表す認識的モダリティの“要”と日本語の対応表現
2. 先行研究
 - 2.1. 主観的な事態発生への確信の程度
 - 2.2. 先行研究の問題点
3. なぜ“要”は「事態の発生が必然的であると推測する」を表さないか
 - 3.1. “要”が「事態の発生が必然的であると推測する」

- を表すとされがちな原因
- 3.2. 不確かさを表す語と共起できる“要”
4. 共起語から見えてくる“要”の機能の一側面
5. 可能性を表す“要”をめぐる日中対照分析
 - 5.1. “要”に対応する日本語のモダリティ表現のメカニズム
 - 5.1.1. 「ダロウ」
 - 5.1.2. 「カモシレナイ」
 - 5.1.3. 「ニチガイナイ」
 - 5.2. “要”をめぐる日中両言語の異なる発想の一端
6. まとめ

1. はじめに

1.1. 可能性を表す認識的モダリティの“要”について

呂叔湘主编(1999)はモダリティの“要”を助動詞とし、その用法のバリエーションを下記のように記述している。

- 1) 表示做某事的意志。(吕叔湘主编 1999: 592)
あることを行う意志を示す。(菱沼透ほか訳)¹
- 2) 须要; 应该。(吕叔湘主编 1999: 592)
…する必要がある。…すべきだ。
(菱沼透ほか訳)
- 3) 表示可能。(吕叔湘主编 1999: 592)
可能性があることを表す。(菱沼透ほか訳)
- 4) 将要。(吕叔湘主编 1999: 593)
もうすぐ…するだろう。(菱沼透ほか訳)
- 5) 表示估计, 用于比较句。
(吕叔湘主编 1999: 593)
推察を表す。比較の文に用いる。(菱沼透ほか訳)

上記の記述から分かるように、可能性を表すというのはモダリティ“要”の認識的用法の一つに過ぎない。また、認識的用法を持つ“要”について、朱斌(2017)

は下記の例を挙げている。

- (1) 看样子要下雨了。(朱斌 2017: 19)
どうやら、もうすぐ雨になる。²
- (2) 她快要毕业了。(朱斌 2017: 19)
彼女はもうすぐ卒業する。
- (3) 他肯定要来的。(朱斌 2017: 19)
彼は必ず来るだろう。
- (4) 比起哥哥, 弟弟要调皮一些。(朱斌 2017: 19)
兄に比べれば、弟のほうが少々やんちゃになるものだ。

上記の例について、呂叔湘主编(1999)が記述した“要”の用法で解釈すると、(1)(2)の“要”は「もうすぐ…するだろう」の意味をし、(3)の“要”は「可能性」を表し、(4)の“要”は比較の文に用いるということになる。そして、朱斌はこの三種類の“要”を認識的モダリティとしている。さらに、佐野洋・張婷(2021: 404)は朱斌(2017)の用例について、(1)(2)の“要”は「事実描写性を持つ」のに対し、(3)の“要”は「未然の出来事(『彼が来ること』)が起こることを推測するという話者の判断を表現し、可能性を表している」と分析している。

このように、モダリティの“要”は認識的な意味に

においても細かく分けた使い方があるが、本稿は可能性を表す(3)のような“要”に限定し、その働き及びそれに対応した日本語のモダリティ表現との違いについて論述する。³

1.2. 可能性を表す認識的モダリティの“要”と日本語の対応表現

可能性を表す中国語の認識的モダリティの“要”は実に多種多様な日本語表現と対応する。例えば、下記のような例がある。

- (5) 不顾实际一味蛮干要失败的。

(吕叔湘主编 1999: 592)

現実をかえりみず、あくまでむちゃを通すならば失敗するだろう。(菱沼透ほか訳)

- (6) 夫文童者，将来恐怕要变秀才者也。

(《阿Q正传》)

そもそも「文童」とは、いつかは秀才に成り変わるはずのものだ。(竹内好訳)

- (7) 幸而车夫早有点停步，否则伊定要栽一个大筋斗，跌到头破出血了。

(《一件小事》)

さいわい車夫がはやく車をとめたからよかったものの、そうでなかったら、ひっくり返って頭を割るほどの事故になったかもしれない。(竹内好訳)

- (8) 然而他对于我，渐渐的又几乎变成一种威压，甚而至于要榨出皮袄下面藏着的“小”来。

(《一件小事》)

しかもかれは、私にとって一種の威圧めいたものに次第に変わっていった。そしてついに、防寒服に隠されている私の「卑小」をしばらく出さんばかりになった。(竹内好訳)

- (9) 这种人十个有十个要失败。

(伊地智善継編 2002: 1286)

こういう人は10人が10人失敗するにちがいない。

(5)～(9)から見ると、可能性を表す認識的モダリティの“要”は「ダロウ」「ハズ」「カモシレナイ」「ンバカリニナル」「ニチガイナイ」に対応でき、決まった訳がないことが分かる。このように様々な対応表現があるため、“要”の意味や使い方などはいっそう曖昧に見える。しかし、“要”の対応表現が多いことは表面的なことであり、その背後に、これらの対応表現を顕在化させる共通のメカニズムなどがあるはずである。そして、この隠されたメカニズムが、“要”と「ダロウ」「ハズ」「カモシレナイ」「ンバカリニナル」「ニチガイナイ」などの日本語表現とどのような異なる発想があるのかという疑問を解く手掛かりになるだろう。

以上のことにより、可能性を表す認識的モダリティの“要”に隠されたメカニズムは何か、可能性を表す認識的モダリティの“要”に関わる日中両言語間の異なる発想は何か、本稿はこれらの疑問をめぐって、分析を試みる。

2. 先行研究

認識的モダリティについて、「主観的な態度」や「事態発生への確信」などの角度から捉える研究が見られる。例えば、徐晶凝(2008)や刘月华等(2001)、周有斌(2010)、杨黎黎(2015)などがある。

2.1. 主観的な事態発生への確信の程度

認識的モダリティに主観的な事態発生への確信の程度があると言われている。例えば、徐晶凝(2008)は次のように述べている。

很多语言中都存在着对情态梯度的细致区分，可以表达说话人在多大程度上承诺命题为真，或者在多大程度上强制某行为被听话人执行，它们分别是认识情态和道义情态的梯度。在现代汉语中，情态的梯度是通过情态助动词和核心情态副词来实现的。(徐晶凝 2008: 84)

多くの言語にはモダリティの段階性に対する細

かい区分が存在する。話し手がどの程度命題が真であることを認めているかを表したり、あるいはどの程度何らかの行為を強制的に聞き手に遂行させるかを表したりする。それらはそれぞれ認識的モダリティと評価的モダリティの段階性である。現代中国語では、モダリティの段階性はモダリティ助動詞と中核的モダリティ副詞を通じて実現される。(張婷訳)

徐晶凝(2008)は、認識的モダリティの段階性という説明の裏付けとして、下記の例を挙げている。

- (10) 他现在可能在家。(徐晶凝 2008 : 84)
彼は今、家にいるかもしれない。
- (11) 他现在应该在家。(徐晶凝 2008 : 84)
彼は今、家にいるはずだ。
- (12) 他现在一定在家。(徐晶凝 2008 : 84)
彼は今、きっと家にいる。

徐晶凝(2008 : 84)は(10)~(12)の“可能”“应该”“一定”の段階性について、出来事が起こる確信がそれぞれ低い・中程度・高いとランクを付けている。徐晶凝の説明と例文から、このモダリティの段階性は事態発生への確信の程度のことであると理解できる。徐晶凝は“要”の事態発生への確信の程度について、明確に言及していないが、モダリティの事態発生への確信の程度に違いがあると指摘した。それに対し、認識的モダリティの“要”の事態発生への確信の程度について言及したのは、周有斌(2010)、刘月华等(2001)、杨黎黎(2015)などである。

周有斌(2010 : 53)は、認識的モダリティの“要”の事態発生への確信の程度は“会”より低く、“可能”より高いと解釈している。しかし、なぜこの結果になったかについて、周有斌は明確に説明していない。

一方、刘月华等(2001 : 176)は認識的モダリティの“要”の語気が“可能”“会”より断定的であると述べている。つまり、刘月华等(2001)は認識的モダリティの“要”の事態発生への確信の程度は“可能”“会”

より高いと見ている。同じように、なぜ“要”は“可能”“会”より、事態発生への確信の程度が高いかについて、刘月华等(2001)も説明していない。

杨黎黎(2015 : 88-89)もモダリティに主観的な事態発生への確信の程度があると表明し、“要”の「必然的であると推測すること」や「主観的な態度」は“应该”“会”より色合いが濃いと説明している。つまり、杨黎黎は刘月华等(2001)と同じように、“要”の事態発生への確信の程度は“会”より高いとしている。

このように、今まで可能性を表す認識的モダリティの“要”に対する「事態発生への確信の程度」は統一な判断基準がないが、“要”の「事態発生への確信」の値があるとされている。

2.2. 先行研究の問題点

2.1.で紹介した先行研究は、認識的モダリティが主観的な事態発生への確信の程度があると指摘したが、すべての認識的モダリティが「事態発生への確信」の値を持っているかどうか、まだ検証が完結していないと思える。具体的に、先行研究で示したように、可能性を表す認識的モダリティの“要”をめぐって、学者によって、「事態発生への確信の程度」の見解が異なり、詳細な論証に至っていない。

また、先行研究は認識的モダリティの“要”を認識的モダリティの“会”と比べて、どちらがより断定的かというような説明をする傾向があり、“要”や“会”が持つメカニズムなどについては触れていない。そのため、“要”と“会”の違いも明らかにされていないのが現状である。これらの先行研究の問題点を踏まえて、次節から可能性を表す認識的モダリティの“要”の分析を通じて、“要”のメカニズム及びその日中対照の発想の違いの一端を示したい。

3. なぜ“要”は「事態の発生が必然的であると推測する」を表さないか

先行研究を見ると、可能性を表す認識的モダリティ

の“要”に当たる説明の中で、「事態が発生することが必然的であると推測する」という解釈が見られる。例えば、魯晓琨（2004：177）では、“要”は“推測某种情况出现的必然性（ある状況が出現することが必然的であると推測する）”⁴と記している。下記の例がある。

(13) 这样就不行！这样你到了社会上就要吃亏。

（魯晓琨 2004：177）

それはどうあってもダメだ！そんなことをしたら、君は社会に出てから必ず損をするよ。

(14) 战事一起，遭伤害的是百姓，你就要落千古骂名了。

（魯晓琨 2004：178）

一度戦争が起されば、被害を受けるのは一般庶民だから、君は後の世まで悪名を残すだろう。

(15) 幸而车夫早有点停步，否则伊定要栽一个大筋斗，跌到头破出血了。

（《一件小事》）

さいわい車夫がはやく車をとめたからよかったものの、そうでなかったら、ひっくり返って頭を割るほどの事故になったかもしれない。

（竹内好訳）

(16) 要不是他把我按住，我可能要一个斤斗摔下去了。

（语料库在线）

もし彼が引き止めてくれなかったら、私はつまずいて転んでしまったかもしれない。

魯晓琨（2004）の説明に基づけば、(13) (14) の“要”は「社会を出てから損をすること」「後の世まで悪名を残すこと」が必然的に起こることを推測しているということになる。しかし、一見“要”はその直後の出来事が必然的に起こることを推測しているように見えるが、実際そうではない。もし、“要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すのであれば、なぜ (14) ~ (16) のように、“要”が日本語の断定形式以外にも対応できるのかという現象を説明できない。これらの言語現象によって、“要”は「事態の発生が必然的であると推測する」を表さないと言える。

3.1. “要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すとされがちな原因

可能性を表す認識的モダリティの“要”は日本語の断定形式（終止形）に対応する用例が多く見られる。例えば、以下の例である。

(17) 你今晚不睡觉，明天要病倒的。

（魯晓琨 2004：175）

君、今晚寝ないと、明日病気で倒れるよ。

(18) 不要反复重复，否则一定要成祥林嫂。

（Sketch Engine）

同じことの繰り返しではダメだ、さもないと必ず祥林おばさんみたいになる。

(17) (18) は可能性を表す認識的モダリティの“要”を用いているが、特に日本語の「ダロウ」「カモシレナイ」などの可能性を表すモダリティに訳されており、日本語の終止形で対応している。

終止形は断定形の一種であり、断定形について、日本語記述文法研究会（2003：146）は「未知の事柄を断定形で述べることがある」と説明し、下記の例を挙げている。

(19) この対戦なら、明日の試合は接戦になる。

（日本語記述文法研究会 2003：146）

(20) あのと、みんなの応援がなければ、僕は負けていた。（日本語記述文法研究会 2003：146）

(19) (20) の下線部の断定形について、日本語記述文法研究会（2003：146）は「話し手の真偽判断を表しており、確信的なニュアンスを伴っている」と説明している。この説明によって、(17) (18) の下線部の「倒レル」「ナル」は断定形で、「話し手が確信的なニュアンスを持って未知の事柄を述べている」と解釈できる。また、「倒レル」「ナル」が“要”とその直後の動詞全体に対応しているため、可能性を表す認識的モダリティの“要”は恰も「事態の発生が必然的であると推測

する」を表しているように見える。

しかし、1.2. で示したように、“要”は様々な可能性を表す日本語のモダリティ表現に対応でき、日本語の終止形だけに対応するとは限らない。そのため、“要”が疑いなく「事態の発生が必然的であると推測する」を表すかは疑問である。⁵ このように、“要”が日本語の断定形式と対応する用例が容易に観察できることが“要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すとされがちな原因の一つと考えられる。

3.2. 不確かさを表す語と共起できる“要”

認識的モダリティの“要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表さないもう一つの理由は、“要”が不確かさを表す語と共起できる点にある。例えば、以下の例がある。

- (21) 油价涨了，以后打的也许要多掏点儿钱了。

(齐沪扬主编 2011: 455)

ガソリンが値上がりしたので、今後タクシーを拾うと、多めに金がかかることになるのかもしれない。

- (22) 会议大概要到月底才能结束。

(吕叔湘主编 1999: 592)

会議はおそらく月末に終わるだろう。

(菱沼透ほか訳)

- (23) 不少开发商或许要失落了。 (Sketch Engine)

多くの開発業者ががっかりと気落ちするかもしれない。

- (24) 可能要下雪，但无论如何我都要进城。

(Sketch Engine)

雪になるかもしれないが、何がどうあっても私は町に行かねばならない。

- (25) 要不是他把我按住，我可能要一个斤斗摔下去了。

(语料库在线)

もし彼が引き止めてくれなかったら、私はつまづいて転んでしまったかもしれない。

(21) ~ (25) の下線部のように、可能性を表す認識的モダリティの“要”は、不確かさを表す語と共起している。もし、“要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すのであれば、(21) ~ (25) の“要”はこれらの「生起することの不確定性」を意味する語と共起できない。なぜなら、「生起することの必然性」と「生起することの不確定性」は互いに矛盾しているからである。

齐沪扬主编 (2011: 455) において、(21) の“要”は“也许”と連なって用いられ、状況に対する推測を表すと説明されている。“要”は事態が必然的に起こることを推測するのに用いられると説明されていない。(22) の“要”に対し、呂叔湘主编 (1999: 592) は可能性を表すと説明している。

また、曹泰和 (2014: 27) は、“也许”“大概”を「確定の語気」ではなく、「推測の語気」という範疇に分類している。(21) (22) の“要”が「確定の語気」ではない“也许”“大概”と共起していることは、認識的モダリティの“要”は「事態の発生が必然的であると推測する」を表すのではないことになる。なぜならば、「必然性」は「確定の語気」に属するからだ。

(23) の“或许”に対し、呂叔湘主编 (1999: 282, 336) は“表示不很肯定；有可能（はっきりとは肯定しないことを表す。可能性はある）”と説明し、(24) (25) にある“可能”に対し、“表示估计；也许；或许（推量を表す：…かもしれない、ひょっとすると）”と説明している。⁶

曹泰和 (2014) と呂叔湘主编 (1999) の説明から、“也许”“大概”“或许”“可能”はすべて必然ではなく、不確かさを表す語であることが分かる。これらの語が“要”と共起できることは、認識的モダリティの“要”自体が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すものではないことを示していると考えられる。

したがって、可能性を表す認識的モダリティの“要”は不確かさを表す語と共起できることは、“要”が「事態が発生する必然性」に関与していないということである。

4. 共起語から見てくる“要”の機能の一側面

第3節で、可能性を表す認識的モダリティの“要”は事態が発生することが必然的であると推測することを表すのではないことを示した。また、第2節で概観したように、先行研究では可能性を表す認識的モダリティの“要”が「事態発生への確信」の値を持っているとしている。しかし、第3節の論証に基づいて考えると、そもそも可能性を表す認識的モダリティの“要”自体は「事態発生への確信の程度」に言及する機能があるのだろうか。答えは“要”と共起する語の有り様にある。

(26) 油价涨了,以后打的也许要多掏点儿钱了。

(齐沪扬主编 2011: 455)

ガソリンが値上がりしたので、今後タクシーを拾うと、多めに金がかかることになるのかもしれない。

(27) 不少开发商或许要失落了。(Sketch Engine)

多くの開発業者ががっくりと気落ちするかもしれない。

(28) 可能要下雪,但无论如何我都要进城。

(Sketch Engine)

雪になるかもしれないが、何がどうあっても私は町に行かねばならない。

(29) 会议大概要到月底才能结束。

(吕叔湘主编 1999: 592)

会議はおそらく月末に終わるだろう。

(菱沼透ほか訳)

(30) 他肯定要来的。(朱斌 2017: 19)

彼は必ず来るだろう。

(31) 不要反复重复,否则一定要成祥林嫂。

(Sketch Engine)

同じことの繰り返しではダメだ、さもないと必ず祥林おばさんみたいになる。

(32) 老是学着别人的样子走路, 必定要落伍,甚至被淘汰。

(Sketch Engine)

いつも他人真似ばかりでやっていくと、必ず時代遅れになるし、場合によっては淘汰されかねない。

(33) 幸而车夫早有点停步,否则伊定要栽一个大筋斗,跌到头破出血了。(《一件小事》)

さいわい車夫がはやく車をとめたからよかったものの、そうでなかったら、ひっくり返って頭を割るほどの事故になったかもしれない。(竹内好訳)

(26) ~ (29) はすでに 3.2. で分析したように、可能性を表す認識的モダリティの“要”は“也许”“或许”“可能”“大概”などの「生起することの不確定性」を意味する語と共起できる。このことは、可能性を表す認識的モダリティの“要”は「事態発生への確信の程度」が不確かであることをも意味するように見える。

それに対し、(30) ~ (33) の下線部のように、事態が生起する可能性の確かさの程度が高い語は可能性を表す認識的モダリティの“要”と共起している。

曹泰和 (2014: 27) は、(30) (31) の“肯定”“一定”を「確定の語気」に分類している。呂叔湘主编 (1999: 78, 174) は (32) の“必定”について、“表示主观上认为确定不移 (動かしようがなく確実だと主観的に考えることを表す)”と説明し、(33) の“定”について、“一定; 必定 (きっと、必ず)”と説明している。⁷

曹泰和 (2014) と呂叔湘主编 (1999) の説明から分かるように、“肯定”“一定”“必定”“定”は事態が生起する可能性の確かさの程度が高いことを意味する。可能性を表す認識的モダリティの“要”がこれらの語と共起できることは、“要”は「事態発生への確信の程度」が確かであることをも意味するように見える。

しかし、“要”が一方で「事態発生への確信の程度」が不確かであることを意味し、もう一方で、「事態発生への確信の程度」が確かであることを意味するということは矛盾である。つまり、事態発生への確信の程度が「確かであること」と「不確かであること」は相容れない概念であり、両者は一つの“要”の中に同時に並存することはできないのである。

可能性を表す認知的モダリティの“要”が「事態発生への確信の程度」が不確かであることをも意味するように見えたり、「事態発生への確信の程度」が確かであることをも意味するように見えたりすることは、“要”には事態発生への確信の程度に言及する機能が含まれていないとしか考えられない。

可能性を表す認知的モダリティの“要”に事態発生への確信の程度に言及する機能が含まれていないからこそ、その直前にある様々な、事態が生起する可能性の確かさの程度が異なる語と共起できると考える。つまり、“要”に事態発生への確信の程度に言及する機能が含まれていないため、共起している語の「事態が生起する可能性の確かさの程度」が無理やりに“要”に押し付けられるのである。

5. 可能性を表す“要”をめぐる日中対照分析

1.2. で可能性を表す認知的モダリティの“要”は様々な日本語表現に対応することを示した。一見、可能性を表す認知的モダリティの“要”は多種多様な日本語表現と対応し、複雑な用法がありそうに見えるが、実際、いくら様々な日本語表現と対応しようとも、“要”の背後にあるメカニズムは同じであると考えられる。同じように、可能性を表す認知的モダリティの“要”に対応できる日本語表現も、その背後に共通のメカニズムがあると言える。

この考え方の妥当性を示すには、“要”に対応する日本語表現も分析する必要がある。可能性を表す認知的モダリティの“要”に対応する日本語表現の中で、本稿では代表的なモダリティ表現の「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」を取り上げる。

5.1. “要”に対応する日本語のモダリティ表現のメカニズム

5.1.1. 「ダロウ」

日本語記述文法研究会(2003:134)は「ダロウ」を認知的モダリティに分類している。下記の例がある。

(34) この様子だと、明日は雨になるだろう。

(日本語記述文法研究会 2003:143)

日本語記述文法研究会(2003:143)によれば、(34)の「ダロウ」は「推量」を表すという。また、寺村秀夫(1984)に下記のような記述がある。

ダロウという形で推量の表現をするのは、その根拠が自分個人の知識や経験だけによる場合で、その点で結局は確言的な断定のダと大して変わらないともいえる。ダによる確信的断定を避けるのは、必ずしも確信の度が低いからではない。

(寺村秀夫 1984:229)

寺村秀夫の記述から、「ダロウ」は推量を表すが、「ダロウ」に含まれる確信の程度は断定と大して変わらないと分かる。

さらに、日本語記述文法研究会(2003:149)によると、「ダロウ」は確信の程度を表す副詞と共起できるという。

(35) きっと / たぶん / おそらく、鈴木氏が次期委員長に選ばれるだろう。

(日本語記述文法研究会 2003:149)

日本語記述文法研究会(2003)の説明に基づけば、「きっと」「たぶん」「おそらく」自体は「事態発生への確信の程度」を表せる副詞になる。

そのほか、工藤浩(2000)は推量的な副詞群を下記の四つのグループに分類した。

①確 信：きっと かならず ぜったい(に)

②推 測：おそらく たぶん さぞ おおかた
たいてい たいがい

③推 定：どうやら どうも よほど

④不確定：あるいは もしかすれば
ひょっとしたら ことによると

(工藤浩 2000:203)

工藤浩（2000：203, 205）は、上記の分類に対し、「この四種の相互関係、いわゆる連続的な関係である」と述べ、「話し手の確信の度合いが、①から④の方向で低くなっていくことである」と指摘している。それゆえ、「キット」「タブン」「オソラク」は「確信の程度が高い側寄り」に位置付ける副詞であると考えられる。

「ダロウ」と「キット」「タブン」「オソラク」などの「確信の程度が高い側寄り」に位置付ける副詞と共起できることは、「ダロウ」に「事態発生への確信の程度」に言及する機能があり、しかも事態発生への確信の程度は高い方へ位置づいているということである。

5.1.2. 「カモシレナイ」

日本語記述文法研究会（2003：153）によれば、「カモシレナイ」は「話し手がその事態を可能性があることと認識していることを表す」という。

(36) [ふとんを干そうとしている人に] 今日は雨が降るかもしれないよ。

（日本語記述文法研究会 2003：153）

日本語記述文法研究会（2003）の説明に基づけば、(36)の「カモシレナイ」は「雨が降る可能性があること」を表すようになる。可能性を表す認識的モダリティの“要”はこのような「カモシレナイ」に対応する。

日本語記述文法研究会（2003）は「カモシレナイ」によって表される「事態発生への確信の程度」に触れていないが、「カモシレナイ」が「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っていることはすでに多くの研究で主張されている。例えば、野田尚史（1984）や仁田義雄（2000）などがある。

野田尚史（1984：111）は「『～かもしれない』はその可能性があまり高くないと判断された場合に用いられる」と説明している。仁田義雄（2000：132）は「『カモシレナイ』類が、事態の成立を、確からしさの度合いへの言及を焼きつけたあり方で表している」と説明

している。野田尚史（1984）と仁田義雄（2000）の説明から、「カモシレナイ」は「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っており、しかも「事態発生への確信の程度が低いこと」を表すと言える。

加えて、日本語記述文法研究会（2003：154）は「カモシレナイ」とよく共起する副詞に「モシカスルト」「モシカシタラ」「モシカシテ」「ヒョットスルト」「ヒョットシタラ」「ヒョットシテ」などがあると述べている。これらの副詞は5.1.1. で見た工藤浩（2000）における副詞分類の「不確定」の類に属するものに当たる。つまり、これらの副詞は「確信の程度が低いこと」を表している。

(37) ? たぶん、明日は雨が降るかもしれない。

（日本語記述文法研究会 2003：153）

(37)の「カモシレナイ」に対し、日本語記述文法研究会（2003：154-155）は「『たぶん』『おそらく』などの確信の度合いを表す副詞と共起することがないことはないが、完全に自然だとは言いきれない」と指摘している。

したがって、「カモシレナイ」は「モシカシタラ」などの「確信の程度が低いこと」を表す副詞としか共起できないということからも、「カモシレナイ」は「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っており、しかも「事態発生への確信の程度が低いこと」を表すと言える。

5.1.3. 「ニチガイナイ」

可能性を表す認識的モダリティの“要”と同じく、「ニチガイナイ」も未然の命題に用いることができる。例えば、以下の例がある。

(38) この小説は、ベストセラーになるにちがいあり
ません。（日本語記述文法研究会 2003：157）

「ニチガイナイ」に対し、野田尚史（1984：111）は

「推量の結果、それが真実である可能性が非常に高いと判断された場合」に使われると述べている。また、仁田義雄(2000)は下記のようなことを記している。

「ニチガイナイ」類も、「カモシレナイ」類と同様に、事態の成立を想像・思考や推論の中に捉えた、ということ、単に表しているのではない。事態成立を、その確率への言及を焼きつけたあり方で表している。(仁田義雄 2000: 134)

野田尚史(1984)と仁田義雄(2000)の説明にしたがえば、「ニチガイナイ」は「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っており、しかも「事態発生への確信の程度が高いこと」を表すと言える。このことは、「ニチガイナイ」と共起する副詞で証明することもできる。

日本語記述文法研究会(2003: 159)は「ニチガイナイ」と共起する副詞に「キット」「サゾ」などがあると示し、下記の例を挙げている。

(39) この話を聞かせたら、田中はさぞよろこぶにちがいない。

(日本語記述文法研究会 2003: 159)

5.1.1. で、工藤浩(2000)は「サゾ」を「確信の程度が高い側寄り」に位置付ける、推測を表す副詞に分類していることを示した。(39)の「ニチガイナイ」が「サゾ」と共起できることは、「ニチガイナイ」は「事

態発生への確信の程度」に言及する機能を持っており、しかも「事態発生への確信の程度が高いこと」を表すためである。

5.2. “要”をめぐる日中両言語の異なる発想の一端

第4節で可能性を表す認知的モダリティの“要”について分析を行い、“要”は「可能性」を表すが、事態発生の可能性への確信の程度に言及する機能が含まれていないということを論証した。

5.1. で可能性を表す認知的モダリティの“要”に対応できる日本語のモダリティの「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」を取り上げ、それらの特徴を述べた。「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」によって示された「事態発生への確信の程度」が異なるものの、「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っているところが共通している。

可能性を表す認知的モダリティの“要”は「事態発生への確信の程度」に言及する機能がないからこそ、日本語の「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」などは「事態発生への確信の程度」が異なることを意味しながら、“要”に対応できるのである。

以上で論証した結果に基づいて、可能性を表す認知的モダリティの“要”とそれに対応する日本語表現の「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」との相違の一端を下記の表で示すことができる。

【表】中国語の“要”とそれに対応する日本語表現の相違

	可能性を表す 認知的モダリティの“要”	対応表現の「ダロウ」 「カモシレナイ」「ニチガイナイ」
共通点	知り得ないことに対する認識	
相違点	「事態発生への確信の程度」に 言及する機能が含まれていない	「事態発生への確信の程度」に 言及する機能が含まれている

6. まとめ

可能性を表す認識的モダリティの“要”は様々な日本語表現に対応し、一見“要”の意味や使い方などが曖昧に見えるが、“要”に対応表現が多いことは表面的なことであり、その背後に、これらの対応表現を顕在化させる共通のメカニズムがあるのだ。そのメカニズムの一側面は、可能性を表す認識的モダリティの“要”が「事態の発生が必然的であると推測する」を表すのではなく、“要”に事態発生への確信の程度に言及する機能が含まれていないということである。

同じように、可能性を表す認識的モダリティの“要”

に対応できる日本語表現も、その背後に共通のメカニズムがある。それは、「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」などは、「事態発生への確信の程度」が異なるものの、「事態発生への確信の程度」に言及する機能を持っているところが共通しているということである。

可能性を表す認識的モダリティの“要”は「事態発生への確信の程度」に言及する機能がないからこそ、日本語の「ダロウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」などは「事態発生への確信の程度」が異なることを意味しながら、“要”に対応できるのである。

注

- 1 呂叔湘主編（1999）から引用した説明文及び用例の訳文は、呂叔湘主編（菱沼透ほか訳）（2003）によるものである。以下同様。
- 2 本稿における用例の翻訳は、特に断らない限り、著者の張婷によるものである。
- 3 西洋言語学における「可能性(possibility)」は、「必然性(necessity)」と対になる概念であるが、本稿のキーワードである「可能性」は「可能性(possibility)」と「必然性(necessity)」の上位概念として、「可能性(possibility)」と「必然性(necessity)」の両方を指す。
- 4 引用文の翻訳は張婷によるものである。
- 5 日本語の可能性を表すモダリティについて、第5.1.節で詳しく述べる。
- 6 呂叔湘主編（1999）の説明の日本語訳は呂叔湘主編（菱沼透ほか訳）（2003）によるものである。
- 7 呂叔湘主編（1999）の説明の日本語訳は呂叔湘主編（菱沼透ほか訳）（2003）によるものである。

【キーワード】

認識的モダリティ 可能性 “要” 中国語 日中対照

【参考文献】

（日本語文献・五十音順）

- 工藤浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・益岡隆志 編集『日本語の文法3：モダリティ』岩波書店 pp. 161-234
- 佐野洋・張婷（2021）「時間論によるモダリティ研究への試論：中国語の認識的モダリティの“要”を例にして」『日本認知言語学会論文集』第21巻 pp. 400-406
- 曹泰和（2014）「副詞」沖森卓也・蘇紅 編著『日本語ライブラリー：中国語と日本語』朝倉書店 pp. 21-28
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」仁田義雄・益岡隆志 編集『日本語の文法3：モダリティ』岩波書店 pp. 79-159
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4：モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史（1984）「～にちがいない／～かもしれない／～はずだ」『日本語学』第3巻 第10号 明治書院 pp. 111-119
- 呂叔湘主編（菱沼透ほか訳）（2003）『中国語文法用例辞典：《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店

(中国語文献・アルファベット順)

刘月华等 (2001) 《实用现代汉语语法 (增订本)》商务印书馆

鲁晓琨 (2004) 《现代汉语基本助动词语义研究》中国社会科学出版社

吕叔湘主编 (1999) 《现代汉语八百词 (增订本)》商务印书馆

齐沪扬主编 (2011) 《现代汉语语气成分用法词典》商务印书馆

徐晶凝 (2008) 《现代汉语话语情态研究》昆仑出版社

杨黎黎 (2015) 《汉语情态助动词的主观性和主观化》新加坡国立大学中文系博士论文

周有斌 (2010) 《现代汉语助动词研究》安徽大学出版社

朱斌 (2017) 《现代汉语情态语气成分的关联机制研究》中国社会科学出版社

【用例出典】

《阿Q正传》鲁迅 (1921) 《晨报副刊》

日本語訳本「阿Q正伝」『阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 (呐喊)』竹内好訳 岩波文庫 1981

《一件小事》鲁迅 (1920) 《晨报・周年纪念增刊》

日本語訳本「小さな出来事」『阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 (呐喊)』竹内好訳 岩波文庫 1981

『白水社中国語辞典』伊地智善継編 (2002) 白水社

【使用データベース】

教育部语言文字应用研究所 语料库在线 (现代汉语语料库检索): www.cncorpus.org

アクセス日時 2021年7月20日～2021年8月26日

Sketch Engine: <https://www.sketchengine.eu>

アクセス日時 2021年7月20日～2021年8月26日

【後記】

本稿は著者の修士論文 (2019年度・東京外国語大学) の一部及び、日中対照言語学会 (2020年度冬季大会) における発表に基づいて修正、加筆したものである。